

浄土

1990-8

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（運輸省特別授受承認雑誌）第三三五号
平成二年七月二十五日印刷 平成二年八月一日発行
第五十六卷 八月号





八月の秀句

信濃路は白樺焚いて門火かな
どことなく水音のして盆の町

盂蘭盆や東京にある妻の墓

大橋 越央子

岡本 眸

大岡 龍男

八月号



雑修のものは往生をうる事、万が
中に一二なお難し、専修のものは
百に百ながら生るといえり。

——『念仏大意』

目次

法話

お盆雑想(下)……………林 純 教……(2)

《ずいそう①》

入る日の如く……………戸 川 靈 俊……(9)
——西田先生の歌から——

読者のページ

日本における浄土教の高僧たち(上)……………上 野 浩……(17)

《四行詩》

花 火……………清 川 宗 治……(27)

季語やぶにらみ (4)

立 秋 の こ ろ……………木 下 隆 一 ……(29)

◇◇連載・話の旅(一)◇◇

天草に旅して……………松 浦 行 真……(37)

表紙絵 小林治郎画

法
話

お
盆
雜
想
(下)



はやし
じゅん きょう
林 純 教

(東京・新宿区来迎寺住職)

目連尊者は、中インドマガダ国王舎城外のクリッタ村という所のバラモンの家系に生まれた。今から凡そ二千数百年も昔のことである。当時のインドではバラモンの家系と言えは大変なものであった。周知のようにインドでは階級制度があり基本的には四つの階級から構成されている。バラモン、クシャトリア、バイシャ、スードラの四つである。バラモン

は僧族、クシャトリヤは王侯貴族、バイシャは商業を主とする庶民、スードラは奴隷である。これらの人口比率はピラミット型である事は言うまでもない。その一番頂上の極く極く少数の針の先程のバラモンという特権階級の家に生まれた訳である。何不自由の無い生活を幼時よりしていた事は想像に難くない。

父の跡を継げば将来は全て保証されている様なものだ。しかしながら現実というものはそう筋書き通りにはいかないようである。恐らく目連は幼時より厳しく種々のベダを学ばされた筈である。又、彼れも自らの学問を深める為に、当時六師外道といわれた人々の中の一人サンジャヤベーラティブッタという哲人に師事したのであった。直ぐにその奥義を会得して弟子一百人を有したという。だが目連はそれでも尚、満足できなかったのである。

悶悶とした日が続いた。ちょうどその頃、かつての友人、舍利弗に再会するのである。舍利弗は目連の生まれたクリッタ村の隣りのナーラ村に生まれ幼時より互いに親友であった。目連と共にサンジャヤベーラティブッタに師事した学友でもあった。目連に同じく優秀であった。この舍利弗も又弟子一百人を有する程であったが、この教えに満足できずに目連よりも一足先に、成道後間も無い釈尊の元に行き直ぐ様弟子と共に釈尊に帰依していたのであった。目連は久々の親友の輝くばかりの姿に感動したに違いない。舍利弗のす

すめのままに目連も又弟子と共に釈尊に帰依したのであった。伝説によれば人門して七日目に悟りを得たという。その後、舍利弗と共に釈尊を輔佐し、しばしば師の代講をなし弟子達を指導したという。晩年目連は隆盛になって来た仏教をねたむ外道に瓦石によって傷つけられ、師の釈尊より先に亡くなったのである。

生涯非暴力を立場とした為であった。本当に芯の強いやさしい人柄であった様に思う。

さて、目連の母もその家柄にふさわしい人であったにちがいない。恐らく聡明なやさしい母であつたろうと思う。目連は親の意に反してバラモンではなく釈尊の弟子になる訳だが、目連の心中では、バラモンの家に生まれバラモンではなく釈尊の弟子になった事に対して、たとえ十大弟子と称される程の高弟になつても人間の情としていささかの後ろめたさが、父、特に母に対して無かつたとは誰れも言い切れないと思うのである。その分、余計に何かにつけて、フツと母の事を思い起すのではなかつたろうか。時には托鉢の途中、母に会い度いと思う事もあつたかも知れない。

その一番大事に思っている母親が亡くなつたのである（事実としていつとは特定できない）。目連の悲しみはどんなであつたろうか。氣も狂わんばかりであつたと思う。母は果たして

天上界に行けたであろうか。もしそうでなかったらどうしようかと心も千々に乱れた事であろう。ここで目連が神通力を以て亡き母の様子を見たというのは至極当然の成行きであつたであろう。あるいはこんな見方も出て来るかも知れない。目連は阿羅漢にまで到つた人だ。我々と同じ次元で母の死に接してそんなに心が乱れる筈がないではないかと。否、と私は思うのである。阿羅漢にまで到つた目連でさえも嘆き悲しまずにはいられない程、母と子の絆は深いのである。

随分前の事であるが、知り合いの家で九十才になるおばあさんが亡くなった時のこと、その通夜の晩に故人の三男坊（時に六十才程）がしいんとした祭壇の前で一晩中泣き明かしたそうである。今も昔も、聖者も凡人もその情には変わりはないのである。

さて、いざ目連が亡き母の姿を神通力によって見てみると、あろう事か、母は無惨にも餓鬼道に堕ちていたのである。何でそうなつたのか目連に解る由もない。目連は、こう思つた事だろう。生前は親の意に反してバラモンではなく釈尊の弟子となり思う様に母の側にいて孝養を尽くすことができなかった。そして今又、その母が餓鬼道に堕ち数々の苦しみを受けている。私はなんと不孝者なのであらうと。その悲嘆の様子は人の子であるならば想像がつくであらう。目連はたとえどんな事をしてでも餓鬼道の苦しみの中から、あのやさしかった母を救おうと思つた筈である。

目連は神通力を以て餓鬼道に堕ち苦しんでいる母親に食物を供養したが、母がそれを食べようとすると、たちまち火になってしまう。何度試みても同じであった。目連の悲しみはその極みに達した。

最近では神通力とか、餓鬼道とか、死後の世界の事などということに関しては冷淡な世の風潮であり、その為に、この目連の話が一つのお話として終ってしまっている様であるが、私は必ずしも目連と母親との悲劇に関しては、それが母の死後の事だけであるとは言えないと思うのである。もちろん經典の中では死後の事の如くに表現はされており、それを僭越にも曲解するつもりはないが、この經典中の表現を以って何か我々に訴えて来るものを感じるのである。それが果たして何なのかはつきりとはつかめないが、乏しい私の体験の中でかすかながら感得できた事があった。それはもう数年前の事であるが、私の母親が胆のうを悪くして入院し、手術した事があった。私は遠く離れているので、ひんばんに面会に行く事はできないので、手術当日と以後幾日かは、母のそばに付き添ったのだが、手術を無事終え、手術室からいく分麻酔が醒めかかって出て来た母のやつれた青白い顔を見た時、私は、自己の今までの母に対して行つて来た数々の不孝（敢えて作した事はないが）を詫び実に申し分けないという気持ちにならざるを得なかったのである。今ここに私の存在自体が母のありとあらゆる犠牲の上にあると実感したのである。その後、幾日

かは食欲も無く過ごし、その様子は見るに耐えなかった。思うに目連と餓鬼道に堕ちた母親の悲劇の物語りというのは人間誰しもが必ず一度は体験するいわば普遍的な母と子とのせつばつまった状況を述べたものではないかと思うのである。經典の中では母が餓鬼道に堕ちて苦しむのは、母が生前自分の子供ばかりを可愛いがり罪根が深かったからだとされているが、その罪根が深かったのは、いったい誰のためにそうなったのか、よくよく考えてみると、外でもないこの私というものを育てる一心でそうなったのだと気付くはずである。いふなれば、この私の存在というものの為に母は死後餓鬼道に堕ちなければならなかったのである。目連はそう考えたに違いない。全ての母の苦しみの原因を自己の存在自体に求めるのである。

だからこそ、釈尊は母の苦しみを救う為に敢えて改めて目連に三宝帰依と諸仏衆僧の供養をすすめるのである。

目連が母の罪業消滅の為に、母に代わって諸仏衆僧の供養をするというのではなく、この自分という存在の為に母が餓鬼道に堕ちたのであるから、今こうしてここにいる自分こそが母の今までの恩に感謝し、深く反省し、数々の不孝のあった事を詫び、この私をよくぞ今まで無事に育んでくれたという思いの中で、どうぞお母さん無事に極楽に行けますようにと心中から祈念しつつ諸仏衆僧に供養し、改めて自分自身が仏道に精進していく姿がお

盆というものの本質の様に思うのである。

お盆という行事の中に自分自身の、意識していてもあるいは無意識の中にあっても、かつて作した数々の罪業に対する深い懺悔が無ければ、お盆の意味はないように思う。

仏教は常にいつも主体的に物事を考えていくのである。

人の罪業をその人に代って諸仏に頼んで消滅してもらうなどという余地は全く無いと考えて、自分自身が自らの罪に目覚め、その罪をしかりと見つめいかに浄化していくかという所に釈尊の教えがある様に思う。ともするとお盆というと一種のお祭りの様にのみ考えられている感があるが、ここの所を是非考えていきたいと思うのである。經典に依れば目連は釈尊の教えにより諸仏衆僧を供養して七世の父母に報恩感謝の誠を述べ無事に母は救われたという。そこには目連の再度の仏教帰依があった筈で、目連の母は目連の心からの自身の懺悔によってはじめて救われていくのであると思うのである。再出家といっても良いであろう。目連は母の死によって本当に尊者と呼ばれるにふさわしい聖者になっていたのだと思う。

△ずいそう①▽

入る日の如く

— 西田先生の歌から —

戸川 霊俊
とがわ れい しゅん

(京都・左京区西住院住職)



愛宕山入る日の如くあかあかと

燃し尽さん残れる命

西田幾多郎

この頃、殊に心惹かれる歌である。詠
じることが、哲学することに通じるだけ

に、三十一文字の短かい詩型に心を凝集
した歌ほど、切実に深くひとの魂に訴え
るものはあるまい。

数少なからぬ哲学者「西田幾多郎」の
歌には、どの一首をとっても、わたくし

にとり、ひしと胸にせまらぬものはないが、この歳頃、ひとしおこの歌に心惹かれるのである。

年譜によると、これが詠まれたのは大正十二年——この年は関東大震災の年——先生五十三歳のときということである。

齢五十三といえ、今のわたくしよりも、ずっと若かしり日のことで、この年齢にして、どうして「残れる命」であったのであろうか。

一日、一日と生命を賭けて生き尽くしてあれば、恐らく訪れるであろう明日という日は、すべて残れる命なのかも知れない。

わたくしは、日毎朝夕は山内を歩む。

夕ぐれ大殿の前、天氣のよいとき西をみると愛宕山に沈む落暉が非常に美しい。愛宕山の漆黒の山影に沈んでゆく夕日は、ひとときわ真赤な最後の輝きを残して一瞬に姿を消そうとする。季節によって、いささか西山連峯も南寄りに傾いて沈んでゆくときもある。

燃えつくして、徐ろに、最後の一瞬の光芒をのこして没し去る落日は、美しくても、莊嚴でさえある。浄土教人にとっては西方浄土の到来であらうが、先生にあっては、入る日のすがたは、燃え尽きた命なのである。

人間の終焉のすがたを、哲学する吾自身を、この崇厳きわまりない落暉のさまに譬えられたのであろう。人間にと

って生きて在る限りが自分の生命一日一刻が真実の自己の生命であって、些さかの懈怠も懶惰も許されない。

求道者のような寸刻を惜しんでの真理愛慕が、あの崇高な世界の哲学——西田哲学の形成となっていたのだと思う。

燃えてつきない命は、殆んど「哲学研究」なり「思想」への発表となつて生きて、今日に残されている。

これも年譜の示すところによると、その終焉は日本の敗戦が決定的となる昭和二十年六月七日鎌倉で急逝七十五歳である。

「……国民が引ぶり引づられてどん底に陥入れられた」「世界みずの驕慢無慕の」為政者を難じ、「今日程国家の思想

貧弱はない」と嘆かれ、京都学派の幾多の門下の俊秀とともに、「わが民族の精神的自信を失うようなきこと」を願われ、比較的良心ある政治の分野の人たちにつよく訴えられた。憂国の至情にする指導的な行実、それこそ空襲に次ぐ空襲で祖国癡亡の直前、自らも病魔に倒れん直前——燃えてつきなん残れる命——のそのままの姿であつたと思う。

さる歌の結社誌で眼にふれた文章に——「自分のみならず、すべての歌詠みがそうであろうが、われわれは、一首一首の作歌にいのちをかける。作られたその瞬間でのその歌だけが自分の今の最高の作なのだ……」と。

この言葉は、さる禪家の一老師から伺

がった訓えにも通じよう。——「辞世の時の遺偈に心を砕く。遺偈のために、わが生涯があるようなものだ——」。

燃えつきなんとする落暉と仰ぎ見られたのは、どのあたりであつたろうか。出町から鴨川を東へ、大学のあたり迄は、水車小屋が二つ三つ。あとは一面田畑であつた頃であらうか。或いは、もう少し百万遍の周囲を中心に家が建っていたかも知れぬ。今出川通もあるやなしの狭い通。知恩寺門前は松並木。

いま著名な哲学の道も、そのような名称では知られていなかった頃の東山の山麓、琵琶湖疏水沿いの、御稜とお寺の

森陰の深い、まことに素朴な野道に他ならなかった。

いずれにしても、今の百万遍あたり、飛鳥井町のあたりから——現今のような高層建築に妨げられずに、見はるかす愛宕山に落ちる日への感懐が、この歌に罩められているのであらう。

生きている限りが、一生であることにおいて、余りの生、残りの生が存在するわけでない。若しありとすれば、それは、世に云う「悠々自適」の生でなしに、燃焼しつくすべき充実具足の生であるべきだ。

善導大師の「発願文」での語句「心、顛倒せず、心、錯乱せず、心、失念せず……」の生でなければならぬ。

近ごろ、高齢社会となって「老い」ということが、頻りに言われる。「老い」は老耄であつてはならぬ。恍惚であつてはならぬと思う。

燃えてつきなん残れる命――。

このことに思いをこらして、先生の文章に教えを求める。

――余は今の宗教家に望む。人を救はんよりは先づ自己を救へよ。已れ信ぜずして人を信ぜしめんと欲す豈大膽ならずや。耶蘇教宣教師は神学を研究せんよりは、先づ誠心誠意自己が日常の心を反省して、果して能く基督の真意に合うや否やを研究せよ。仏教の僧侶は梵語や哲学を研究せんよりは深く顧みて称名念仏の為に自己が一身を犠牲

にしうるや否やを検せよ。斯くの如くにして実地修行の上能く自己が宗教を信得せば、所謂教祖の真意なるものも自ら明かに、生氣溢出、哲学神学をかたらずして時に由り人に応じ説法無窮なるべし。

余聞く近代浄土の一僧あり、眼に一丁字を解せずと雖、信心堅固単に称名念仏の声に由りて人を化度せしこと数を知らずと。宗教家たるもの這般の氣慨なかるべからず――（全集）

この眼に一丁字なくも信心堅固、よく人を化度する浄土の一僧に比すべき禪家の一僧を、良寛は「仙桂和尚」なる詩で、軌を一にして教えてくれる。

仙桂和尚は真の道者

黙して言はず朴にして容らず

三十年国仙の会に存りて

参禅せず読経せず 宗文の一句を道は

ず

園菜を作つて大衆に供す

当時 我れこれを見て見ず

これに遇うて遇はず

呼呼今これに効はんとするも得可から

ず

仙桂和尚 真の道者

この仙桂和尚とは、道元禅師が天童山如浄禅師の会下にあらわれた日に接しられた典座の僧にも似た存在であらうか。

あかあかと燃えつきんとするということとは、どういうことであらうか。

人それぞれには「入る日」は同じように訪れては来るが、その燃え尽くしようは、結局は、各人各様のものだと思われる。

あながち、赫々たる功勲や、業績といった類いばかりではない。他者から見てのそれではなしに、要は各々の自覚のものであらう。しかし、燃やし尽したと自覚できる者は、ひとりとしてなからう。

自らの努力をつくして、曩の称名念仏の浄土の一僧のように、仙桂和尚のように、一隅にあつて、黙々と、一隅を照らすに、専ら精魂をつくして生きる、魯の

如き、愚直一遍の姿に燃え尽きん大日輪のあかあかとした生の終焉とされるものが見られるのではなからうか。

世俗的に、その職業で偉くなった、偉くならないが、往々言われる。その場合、偉くなったということが、その人間の、燃えてつきなん姿であらうか。入る日の如くの人生の暉きであらうか。

わたくしは嘗て、さる大坊の信徒総代であられたある企業の方——今は故人となっておられる——から伺ったことがある。それは、仏教の古来の学問で、内外に秀れた学僧として猊座に就いておられた方の、最後臨終の座につらなった場での、異様なまでの現生執着の相に胸うたれたということである。

大悟徹底の筈の高僧がというより、高僧ですら、現世最後の刹那の生への執着は、人間の本然の相であって、奇異とすべきでないと教えられたと述懐された記憶がある。

輝やかしい研究業績、そして宗教者としての永年の教化——それらは、その師の人生での誤りなき終生かけての功業であつたであらう。学問宗の棟梁として仰いでいただけに、その様なお話を耳にした時、若かりしわたくしは、何ものにともなく、不快不信の念に駆られたのである。

しかし、各人各様の燃えつき様を考えると、これも一つのそれでよろしい燃え方であらう。

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っています。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

日本における浄土教の高僧たち（上）



上^う
野^{えの}

浩^{ひろし}

一体、私共人間の死後はどうなるのか、なにひとつでも多かれ少なかれ、このような疑問を持たないものはあるまい。

ところで私共はいかな人間でも、例えば出家修行者であろうが、在家の信者であろうが、またかつての悪人であろうが、

罪人であろうが、そのような人々をも一様に慈悲の心の中に包みこみ、その人々が真心から簡単な修行をつみさえすれば、その死後はかねて希望する、美しく、かつ安楽な仏国土に往生し、そこで永劫に、再び生れかわることもなく、安らかな生活を送ることができるという道があるのである。これは仏教における浄土教の教えるところである。

それでは浄土教とはいかなるものか。これは私共が「仏陀」にすがって、お願いすればいいのである。では仏陀とか何か。インドにおいては古い時代に多くの仏道修行者が出現し、その修行者たちは

私共衆生の後生のために、みずからきびしい修行をつづけ、かねて立てた誓願を成就して遂に仏陀（如来）となった。仏陀とはすなわちさとりをひらいた仏道修行者のことである。私共はこれらの仏陀を信じ、その仏陀を念ずれば死後その仏陀の仏国土に往生することができると思われたのである。

現在においてもこれらの仏陀は数多く存在している。そのうちでも私共に特に敬愛されている仏陀といえ、釈迦如来（仏国土は靈山浄土）、阿彌陀如来（仏国土は極樂浄土）、大日如来（仏国土は密嚴浄土）、薬師如来（仏国土は淨瑠璃世界）、阿閼如来

(仏国土は妙喜浄土)などがある。

しかし、わが国においてはこれらの仏陀のうちでも特に阿弥陀如来が最も人々の敬愛を受けている。その阿弥陀如来はもと一国の王様であったが、ながい間の仏道修行によって仏陀となり、今はこの世界の西方、十萬億の仏国土を超えたところに極楽浄土を建設し、私共の往生を心から待っていてくれるのである。ところでこの阿弥陀如来を支持する名僧も多く、例えばインドにおいては特に馬鳴、龍樹、世親(天親)、中国においては、廬山の慧遠、曇鸞、道綽、そして中国浄土教の完成者、善導をあげることができよ

う。

わが国においても浄土教をとнаえ、浄土教をひろめ、浄土教を解説し、そして文書にまとめあげた名僧も極めて多い。しかし私はここに浄土教を支えた多くの名僧のうちから、次の十名の名僧をあげて、その事蹟などをふり返ってみたいと思う。

円仁(七九四―八六四)

円仁は下野の人、俗姓壬生氏といい、土地の豪族であった。円仁が仏教の修行をはじめたのは岩舟町の大慈寺で、九才

から十五才までを過したときである。大同三年（八〇八）、円仁十五才のとき比叡山に登り、最澄に師事し、天台学を学んだ。

承和五年（八三八）入唐し、全雅について梵学、および密教を学んだ。そして翌年帰朝しようとしたが逆風にあつて果すことができず、そこで中国の五台山をはじめ多くの寺を歴訪し、その後遂に長安に到着した。ここで元政、義真、法全について両部大法を伝授され、また宗叡について止観を学ぶことができた。

在唐九年、承和一四年（八四七）帰朝すると、斉衡元年（八五四年）公式の天台座

主におされた。そしてさらに円仁は仁明、文徳、清和らの天皇に対して戒を授けたのである。

円仁はさらに比叡山において常行三昧（念仏三昧）をはじめたが、これはのちのわが国浄土教の起源となった。この意味において、円仁はわが国浄土教の基を開いた名僧といえよう。入唐中の日記「入唐求法巡礼行記」は有名であり、その他にも著書が多い。慈覚大師という。

空也（九〇三—九七二）

空也は延喜三年（九〇三）の生れである

が、その郷里や父母については全くわからない。その出生は謎となっているが、醍醐天皇の落胤とか、仁明天皇の子という説もある。

空也は少壮のころから在俗の修行者として五畿七道の名山や靈窟をめぐり、その途すがら悪路があれば鍬でならし、橋がなければ橋をかけ、水脈をみつめては井戸を掘ったりした。また荒野に放置された死骸は、一ヶ所に集めてこれを焼き、回向をしたという。

二十才を過ぎて、尾張の国分寺で剃髪し、出家者となり、空也と呼んだ。しかし、未だ自度僧にすぎなかった。そして

彼の前半生は遊行、苦修、化他の優婆塞沙弥の生活にすぎなかった。

三十才をこえたころ、空也は天慶の大乱をまじかにして物情騒然たる東国をさけて、都に足に向けたのである。天慶元年（九三八）三十五才の彼は都にはついたが、その時の都は荒れに荒れ、市場には乞食、貧者が群がり、悪疫は猖獗を極めているという有様であった。入京した空也は市中を乞食し、その得た布施は仏事に使い、また貧者などに施与したりした。

しかし、市井の遊行僧にすぎなかった空也も、天曆二年（九四八）天台宗座主延

昌の得度を受け、正式の僧侶となった。

そして空也の受戒後、その周囲には貴族などが姿をみせはじめた。貴族層を背景にして大規模な仏事、作善が空也を中心として行なわれるようになった。すなわ

ち天曆五年（九五二）の観音像をはじめ、

その他の天部像などの一大造像事業がそれである。また空也の一大事業として金字の大般若経六百巻の書写をはじめたが、これは十四年の月日をついやして完成した。

空也の信仰宗教は、仏像では観音、弥陀を崇め、經典では法華、般若を読誦して、まことに雑信仰的なものであった

が、その中心は浄土教であった。わが国念仏の祖であり、僧院の念仏を一般の民衆に開放した人物である。多くの人々から「市聖^{イチセイ}」と呼ばれたのもまた当然のことであろう。

源信（九四二—一〇一七）

源信は天台宗の僧で、唐の善導の流れをくんだ称名念仏を採用し、わが国における浄土教の基礎を築いた名僧である。

天慶五年（九四二）大和国に生れる。七才にして父を失う。その後比叡山の良源に師事し、十三才で剃髪受戒して名を源信

といった。そして横川の恵心院に住して、修行と著作に従事したので世に恵心僧都と呼ばれた。

永観三年（九八五）、七年かかって名著「往生要集」を書きあげた。この書の内容について、「厭離穢土」の章は地獄の恐るべき姿を生々と描き、「欣求浄土」の章は一転して浄土のすばらしさを説いて、以下念仏修行について精細に説明されている。この作こそわが国浄土教を体系づけた画期的なものであった。これが法然に影響を与え、さらに親鸞へと受けつがれてゆくのである。

この書を宋の周文徳はほめたたえ、源

信を「日本小釈迦源信如来」と称讃したという。

良忍（一〇七二—一一三二）

良忍は尾張の人で、父は藤原道武という知多郡の領主、母は熱田神宮の神官の娘だという。良忍ははじめ良仁と名乗る。比叡山で良賀から天台を学び、永意に密教を受け、寛誓より声明を伝えられる。天仁二年（一一〇九）大原に來迎院、浄蓮華院を建立し、声明梵唄（仏教声曲）に専念、後に天台声明の中興の祖とされた。

良忍は天台宗の出であるが、融通念仏

を説き、日別に念仏をとなえること六万遍といわれた。念仏行者であったが、永久五年（一二七七）阿弥陀如来を感じし、「一人一切人、一切人一人、一行一切行、一切行一行」の偈を感得した。これが融通念仏で、多くの人がとなえて、たがいに融通し合って往生の機縁をうるという教義である。これは弥陀直授の法門と称されている。

天治元年（一二二四）京都に入り、鳥羽上皇をはじめ公卿百官にこの法を説いた。また諸国を巡化し、大治二年（一二二七）大念仏寺を開いて根本道場として

いる。

法然（一二三三—一二二二）

法然は長承二年、美作国に生れた。父は漆間時国、久米郡の押領使であり、母はこの地方の氏族、秦氏の出であった。

法然九才のとき父を失う。久安三年（一一四七）、法然十五才になったとき比叡山に登って受戒した。そして北谷の源光や皇円について天台学を修めた。しかし当時、比叡山は座主の地位をめぐって門閥争いがはげしく、法然はこれに失望して隠遁の志が深く、久安六年（一一五〇）、

十八才の折、西塔黒谷の叡空のもとにうつった。叡空はここで法然に対して源信の著した「往生要集」による念仏の修行を教えたのである。

これより二十余年間、法然の黒谷における求道の日々がつづいた。しかし法然の心の中には「おのれは戒、定、慧三学の器ではない。この三学の器ではない。

この三学のほかにわが心に相応する法門はないか」とおのれに合った法門をさがして魂の遍歴をつづけたのである。この間一切経を統破すること五たびに及んだという。

心の彷徨をつづけた法然に、ふとあか

るさがさしてきた。「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」という唐の善導の「観経疏」の一節に遭遇したのである。法然は忽然としてさとった。そして承安五年（一二七五）、四十三才のとき、浄土教における「専修念仏」という一大教義を発見、発表、そして宣揚したのである。浄土宗の立教開宗である。

二十五年に及ぶ修行をおえて比叡山におりた法然は、まもなく東山、大谷に住房を構え、みずからかく信ずる専修念仏

の教義に没入する生活にはいった。そして表然の名声はますます高まった。この人気の高まりは既成教団のねたみと敵視をかった。専修念仏に帰順する徒が広汎になればなるほど、南都北嶺の弾圧の手が延びてきた。

建永二年（一二〇七）、二月、この弾圧の手は遂に法然の門弟たちにとどまらず、法然みずからの身に及び、老齢七十五才の法然は四国の土佐（実際は讃岐であった）へ配流の身となってしまった。しかし配流の身の法然は強く説いた。「たとえ死刑になっても専修念仏の教法だけは申さずにおれないのだ」と。ここに法然

の信念の強さとまた心の強さとをみるのである。

この年の暮、赦免の宣旨があったが、未だ入洛は許されなかった。そして建暦二年（一二二二）、八十才の法然は大谷の禪房で「一枚起請文」をのこして没した。

法然は人格高潔で、信者からは「弥陀の化身」、あるいは「善導の再誕」などといわれ、その教えた専修念仏の真の心は、その著「選択本願念仏集」の中に宿っている。

四

行

詩

花
火

豪華な打上花火を夢見て
一心に興じる
照らし出された子供の笑顔
私は決して忘れない

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



最新好評のトラクト

竹 中 信 常 著

佛 心 凡 情

ポケット版二四六頁
イラスト入り

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた文集。法話の材料または施本として御利用下さい。

定価 五〇〇円 送料 二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六
電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)二―八二四七

季語やぶにらみ (四)

立秋のころ

木のしたりゅういち
下隆

(随筆家)

俳句歳時記の四季の部立は、太陰暦の二十四節氣に準拠している。即ち、立春から雨水・啓蟄・春分・清明・穀雨を経て立夏の前日までが春。立夏・小満・芒種・夏至・小暑・大暑と過ぎて立秋の前日までを夏。立秋から処

暑・白露・秋分・寒露・霜降ときて立冬の前日までを秋。そして立冬・小雪・大雪・冬至・小寒・大寒を経て立春の前日までを冬と区分しているのである。これを太陰暦に当てはめると、春は二月四日ごろから五月五日ご

ろ、夏は五月六日から八月七日ごろまで。また秋は八月八日ごろから十一月七日ごろ、冬は十一月八日ごろから二月三日ごろに相当する。

だが、この二十四気節というのが、私にはどうもよく分からない。辞書を見ても、「陰暦で、太陽の黄道上の位置によって定めた季節区分。初期の陰暦では一年を二十四等分した平気であったが、後に黄道を二十四等分した定気を採用した」(日本国語大辞典)「太陽年を太陽の黄経に従って二十四等分し、季節を示すのに用いた中国伝来の語」(広辞苑)などと記されているだけで、何を基準にして立春を定めたかということは書かれていないから、隔靴搔痒の感は免れないが、それを解明したからといって、別にどうってこともないので

ある。太陰暦が農事暦としての存在価値を失った今、宗教的行事の標となっているだけで、二十四節気の中では、春分・秋分の日が国民の祝日として、僅かに我々の生活に関わっているに過ぎない。

太陰暦がいつごろ中国から伝来したかは定かではないが、中国文明の流入が始まった極く初期のころ、神秘的呪術的なものとして、何ら抵抗なく受け入れられたのではないだろうか。万葉集卷十の冒頭に、柿本人麻呂の作と伝えられる「ひさかたの天の香久山この夕べ霞たなびく春立つらしも」という歌が載っているところを見ると、七百年代初頭には、すでに「立春」の観念は確立していたと考え、て差し支えないだろう。以来、立春に限らず二十四節気の名称だけは、それがたいした意

味を持っていなくても、今もなお我々の意識の中に生きていて、啓蟄（三月六日）と聞けば、冬眠から覚めた虫がぞろぞろ這い出してくるような錯覚に捉われて春の到来を感じたり、「今日は大暑（七月二十四日）」と言われると、たとえそれが肌寒い日であったとしても、「何しろ土用だもんな」などと、妙に納得してしまったりするのである。

青空のただ一ト色に秋立ちぬ 小島政二郎

八月八日、立秋である。暦の上ではこの日秋に入る。明治五年に太陽暦が廃止されてからこれ百二十年近く経つというのに、いまだに暦の上ではという言葉は慣用句として生き続けているから、不思議といえば不思議である。またこの日は、「全国高等学校野球選手

権大会」いわゆる「夏の甲子園」の開幕日でもある。本来なら「秋の甲子園」と呼ばねばならぬところだが、テレビ中継のアナウンサーが「一年ぶりに暑い夏が甲子園に戻ってきました」とやるから、そこには秋の気配は微塵も感じられず、中継の合い間に流すニュースの時間に、「今日は立秋。箱根仙石原では芒の穂も出始めて……」などと女性アナにコメントされると、却って違和感を覚えてしまう。NHKが高校野球の全試合を完全中継するようになって何年になるだろうか。私はこの期間母校が出場しているわけでもないのに、ついテレビのスイッチを入れてしまう。一種の情性で大いに女房共の響きを買うが、中継ディレクターの中に何人か詩人がいて、時々彼らが送ってくれる空の映像を秘かに楽しん

でいるのである。

六甲山頂に湧く、地元では丹波太郎と呼ぶ巨大な雲峰を見せてくれたかと思うと、会期半ばを過ぎると、ぎらついて見えた空の光は薄れ、映像は鯛雲を浮かべた秋の空へと移行して行く。そのころになると、「日差しは一向に衰えませんが、空の色はもうすっかり秋です」と、アナウンサーも急に詩人に変身したりする。

上行くと下行く雲や秋の空

凡兆

約二週間の会期中、朝から夕方まで間接的にはあるが、一地点の空のたたずまいを見られる機会はそうざらにあるものではない。何年分かの空の映像だけを取り出して繋ぎ合わせるのもよし、また、その年の初日から最終日まで空だけを写して編集しても、番組の一

本や二本出来るなあ、と思ったりしながら見ているのである。「秋来ぬと目にはやさかに見えねども風の音にぞおどろかねぬる」(藤原敏行『古今集巻四』)の響みに倣えば「雲の色にぞおどろかれぬる」なのであるが、一昔前まで外野席の彼方の空に林立していた甲子園名物のアドバルーンが、殆ど影を潜めてしまったのが淋しいといえは淋しい。アドバルーンは、もはや広告の媒体としての力を失ってしまったのであろう。日本の空からアドバルーンが姿を消す日は、そう遠くないかもしれない。

俳句では「季重ね」を嫌うが、歳時記を検索すると、これが案外多いのに驚く。私が主に参考に使っているのは講談社刊の「日本大歳

時記」で、監修者に水原秋桜子 加藤楸邨、

山本健吉を据え、編集委員には委員長の山本健吉以下飯田龍太、尾形仂、草間時彦、沢木欣一、森澄雄、山下一海と錚々たるメンバーが名を連ね、その他の執筆者に至っては綺羅星の如くで、とてもここには書ききれない。

また例句の収集は例句委員会を設けてこれに当たり、選定は編集委員会が行った、と万全とも思える態勢で臨んでいるにも拘わらずである。例えば、西島麦南吟のこの句、

凌霽のうぎんに井戸替すみし夕日影

は、季重ねの上に、凌霽（晩夏）、井戸替（初夏）の両季語の例句に挙げられているのである。句切れのない句に二つの季語、どちらを主季語とするかは意見の分かれるところであらうが、選定委員の厳しい目をかい潜って、

最終的には両季語の例句に収まっているのは単なる編集ミスとは言いい切れない問題を含んでいる。

井戸替えを初夏の季語としたのは、多く梅雨で地下水が増水する前に行われていたからと説明されている。井戸水を生活用水として重宝していた時代には、井戸替は年中行事のように行われていたのであろうが、初夏と限定するのは早計すぎはしないだろうか。麦南の句は明らかに晩夏の井戸替を詠んでいる。

——井戸替を終えて井戸から出てくると、

井戸端の立木の梢まで咲き上った凌霽の花にはやあかあかと夕日が当たっていて、花の色を一層鮮やかに彩っている。「おや、もうこんな時刻か、随分手間どったな」という井戸替職人のほっとした表情がうかがえるし、井

戸の底にこんこんと湧き出ている水の音さえ聞こえてきそうな句である。

生活用水確保に必要な井戸替に主眼を置いた選者は、凌霽の存在をなおざりにした嫌い無きにしも非ずであるが、井戸替という季語は多少軽く扱われている。その証拠に井戸替の例句を見ると、

井浚ひの始まる萩を束ねけり

前田普羅

晒井にたかき楊の落花かな

飯田蛇笏

晒井や虹出てあがる昼の雨

太田暁水

と、他の季語を配して句意を整えているのが目立つ。このように補助季語を必要とするものは、季語の枠から外してもいいのではないかと私は思っている。

秋立つとうぜんかつら垂るゝかな

は、季重ねの名手といわれ、それゆえに月

並の宗匠と陰口された久保田万太郎の作である。劇作家としても俳人としても著名な人だったが、「月並の宗匠、結構ですな」と恬談としていたというから、さすが大家である。「日本大歳時記」にも多く例句に引かれているが、その何割かが季重ねの句なのである。

夏の部から引くと、

えにしだの黄にむせびたる五月かな

夏の夜や水からくりのいつとまり

つゝみくれし麦落雁や日のさかり

夕月といたゞきて夏やかたかな

夕焼の風に消えゆく真菰かな

河童忌や河童のかづく秋の草（主季語）

などが散見されるが、河童忌の句は二季に跨っている。昭和二年七月二十四日自殺した芥川龍之介を偲ぶ河童忌に、夏草ではなくて

敢えて秋草を配したのは、秋草を被った孤影
悄然たる河童を腦裏に描くことよつて、万
太郎は万太郎なりの感慨をこめて龍之介を偲
んだのであらう。この句を除けば、えにしま
も水からくりも、季語とは認識していないよ
うに思える。日のさかりは多少ニュアンスが
異なるが、夕月も夕焼も一年中見られる自然
現象で、万太郎俳句のようにおおらかに詠ま
れると、これらが夏の季語として登録されて
いるのを忘れさせる。要するに、彼は主季語
さえきちんと据えておけば、修飾部に他の季
語が入り込んでもめくじら立てる程のことは
ないじゃないかという態度に終始していたよ
うに思えるのである。

現代の俳句作家は、膨大な数の季語に自縄
自縛に陥つてはいないか。季語を細分化しす

ぎるのも考え物である。季重ねを錦の御旗の
ように振りかざされると、夏の海にボートを
浮かべることも出来なくなるし、夕焼に染ま
るヨットの帆も詠めなくなる。ビールやアイ
スクリームにしても、いまや夏だけの嗜好品
とは言い難い。梅雨の半ばには咲き始める木
槿を秋、伊豆では初蟬であるが蝸を秋と決め
つけられると、戸惑いを覚えるのは私だけで
はないだらう。

立秋のころの気候は甚だ流動的で、あらゆ
る面で夏と秋がせめぎ合っている季節で、立
秋を以て、秋来ぬとスバツと割り切るわけに
はいかない。「暦の上では」とは、まことに
融通無碍な便利な言葉ではある。

(この項終わり)

○『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』八月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八八二二八七

話の旅 (一)

天草に旅して

— 三宅春光師の生活と意見 —

まつ うら ぎょう しん
松 浦 行 真

(浄土宗出版室長)

夜来の嵐はうそのように静まって、その日の八代海も島原湾も、すっかり風いでいた。

島のある風景には、どこにも似かよったような印象がある。

海にかかった橋というので、いちやく名をはせることになった瀬戸大橋を渡つ

たのが、つい四日まえのことである。そしてきょうは天草五橋を渡る。バスの車窓から見る印象は、瀬戸内海もあまり変わらない。

しかし海は、文句なしに天草のほうが美しかった。

その違いは、人の集まりぐあいの差で

あろうか。そして、上天草と下天草を結ぶ橋もまた、瀬戸大橋というのだった。

私の目指すのは、牛深市の無量寺というお寺であった。そこには、前宗議会議長の三宅春光上人がおられる。その三宅さんをたずねるのが、私の目的であった。そこに到り着くには、まだ下天草島を縦断しなければならない。

三宅さんにはじめてお目にかかったのは、去年の晩春のことだった。三宅さんが一宗功労者として表彰を受けられた、そのお祝いの席である。もちろん私はそのとき、天草にまで三宅さんをお訪ねする機縁が、これによって生じるとは夢にも思っていなかった。

挨拶がすむと、私は黙々と箸をうごか

していた。宗の役職者の最末端に連らせて貰ってはいたが、宗政には縁遠く、ほとんど知るところがなかったからである。

そういう私を三宅さんに紹介してくださったのは、宗務総長の大田秀三上人だった。ちょうど『伝弘の生涯——岩井智海大僧正伝』の本誌連載が始まって間もなくのころだったので、大田さんは私というより、そのことを紹介されたのである。すると三宅さんの口からもれたのは、

「私は岩井上人には可愛がられてね」という一句であった。私はギクリとして箸を止めた。

「どこですか」

「そりや大音寺さ、長崎の」

こうなると、もう料理どころではない。

じつは私は、やがて大音寺時代の岩井さんを書かなければならないのに、どなたに取材していいか、さっぱり五里霧中のでいたらくで、いらいらしていたのである。

私は紙と筆記具をバックから取り出すと、三宅さんの前ににじり寄った。そして三宅さんを独占すると、三宅さんのおサケ好きなどそっちのけで、聞きまくったのである。

その結果については、読者の方がよくご存じであろう。私はほとんど一字も余すことなく、伝記のなかに書かせてもらった。

今度の岩井さんの伝記では、こうしたことで救われたことが、再三、あった。岩井大僧正の奇しきお導きかと思うほどであった。

その大僧正の伝記連載はともかくも終了にこぎつけたが、しばらく間をおいて、つぎには椎尾弁匡先生の生涯にとりかかる。

べつに間などおかなくともいいのだが、じつは取材も準備も、まだほとんどが空白なのである。時間的余裕がないのだから、やむを得ない仕儀といえぼそれまでだが、しかし『浄土』の編集部も手きびしい。「さればその間、随筆を書け」ときた。「好きなことを書いて結構。あなた、書くことで人生の大半、メシを食

つてきたのでしょう」といわれれば、グ
ウの音おとでもない。

私は三宅さんからたびたび、

「浄土宗はもつと吉水良祐上人のことを
顕彰せにゃいかんですよ。あなたも一つ
筆をすすめて、吉水上人のことを書きな
さい。それにはぜひ一度、天草へおいで
なさい」

と勧められていたことを思いだした。

文政六年に生まれ、明治二十七年（一
八二一九四）に遷化された名説法家・吉水
良祐は天草の出身なのである。

（そうだ）

と私は思った。

（天草から始めよう。高僧をもって巻を
はじめるのは、『浄土』という雑誌の性

格にもふさわしいのではないかと。

と。

吉水良祐上人のことは「伝弘の生涯」
にも書いたが、岩井さんの著書「道しる
べ」にある『廃仏毀釈の思い出』を読ん
だのが、私の初見である。岩井さんはこ
の回想記を、昭和九年（一九三四）の「中
央仏教」という雑誌に発表されている。

当時、九州を中心として、日本全国に
名を知られた名説教師が、二人いた。

真宗の七里恒順上人と、もう一人はい
うまでもなくこの吉水良祐上人である。

七里恒順和上については、常光浩然著
「明治の仏教者」に詳しい。七里がどの
ようにして説法の準備をし、語りかけを
したか、この書を読んで想像をめぐらせ

れば、それなりに察しはつく。

しかし浅学非才の筆者にとって、吉水良祐は大橋俊雄さんの「浄土宗仏家人名事典」か「浄土宗大辞典」に拠るしかない。しかもこの両書は編集の目的があくまでも「辞典」だから、想像のめぐらしようがないのである。私ははたと行き詰まってしまった。

そういうとき、三宅さんに出くわしたのである。三宅さんは盃を含みながら、「吉水上人は説教の名人だね。大阪で布教中になくなった。そのとき、芝居者が上人に一服盛ったという噂がでたくらいだね……」

と、こともなげに言った。
「それやまたどういうことですか」

「吉水上人が説教されるちゅうと、大阪の芝居が空っぽになった。みんな上人の説教の方へ行っちゃまうんだね。芝居者はメシの食い上げだあ」

読者よ、筆者が三宅さんの話に、いかに随喜したか、ご想像にかたくはないと思う。

三宅さんは昭和六十年に隠居されたが、それまで住職をつとめておられた無量寺は、久玉町のさる小高い山の裾にあった。久玉はバスの牛深港終点から一〇分ほど手前で、少し内陸に入っているが、もちろん牛深市内で、国道266号線沿いにあった。

潮風をうけて、独特の枯れた木地をみせている二層の山門が、まず私には印象

的であつた。

挨拶のあと、そのことを三宅さんに言うとき、老朽化したため、昭和二十四年に新しく建てたのだという。私はびっくりした。二十四年といえば戦後も戦後、まだまだ日本は敗戦の打撃とドラスチックなインフレから立ち上がれず、貧乏のどん底を低迷していたときではないか。その時期にこれだけの山門を建てるといふことは、ご住職の熱意もさることながら、檀徒衆の意気込みが大変なものではないと、出来る相談ではない。無量寺は末寺が八ヶ寺ほどもある大寺と聞いてはいたが、それにしてもこれは想像のらち外である。

すると三宅さんは、私のけげんそんな

表情を読み取ってか、言った。

「牛深は漁業の町なんですけども、イワシが主でしてね。戦後はこれが獲れに獲れて、漁師はカネのしまい場がない。それで甕なまのなかに札束を投げ入れよつたもんです。今でいう長者番付にのる人がここからぞくぞくと出よつた。ものすごいイワシ景気じゃつた。それにしてもまあ、(山門が)よく出来たと思つてねえ」なるほどと、私はフにおちた。

もう二十年以上にもなろうか。長崎に取材旅行をして、夜、後輩の支局長が私を案内してくれたのは、イワシの刺身で知られる店だった。いまでこそ東京でもイワシの刺身を口にするにはできるが、当時は珍しかったものである。牛深

にとっても長崎にとっても、東シナ海はイワシの宝庫だったのである。往年ほどではないが、いまでも牛深はイワシ漁業が主流だそうだ。西のはてのように思われる天草だが、内緒は豊かだったのである。

良祐上人はその下天草島の一町田に生まれた。無量寺からおよそ二五キロほど北の、ほぼ島の中央に位置する山村である。上人はそこから同じ天草の天草寺・道誉良慶のもとで得度し、長じて江戸の増上寺に学び、明治二年に帰郷してその天草寺に晋董したと辞典にはあるが、その後、名が変わったのか廃寺となったのか、天草寺は現在の寺院名鑑にはない。そしてそこから大音寺に転じたところであ

て、無量寺の名は出てこないのである。このあたりの消息を三宅さんに聞くと、もともと天草寺という浄土宗の寺院はないのだそうで、それは多分、崇円寺の誤りであろうということだった。崇円寺は良祐の師・道誉良慶が住持した寺院である。

三宅さんはさらに語をついで、つぎのような話をしてくれた。

「良祐上人は嘉永三年（一八五〇）にここ（無量寺）の十八世住職になっておられる。そのとき二十六歳だったと記録にあります。私も二十六歳でここの住職になったが、今でこそヤングの時代とかなんとかいうけれども、私ゃここの寺には若すぎると総代会で言われてね。だから一べん

では決まらなかった。けれども良祐上人の場合はすんなりとなっておられる。しかも時代は嘉永ですよ。よっぽど徳望があつたんだろうと思うな。

そして安政六年（一八五九）に三十五歳で、河浦町の崇円寺へ転じておられる。河浦町というのは現在、一町田がぞくしておる町ですよ。

ついでに申し上げておくと、明治八年（一八七五）五十一歳で長崎の大音寺、六十四歳で鎌倉の光明寺、その二年後の六十六歳に東京小石川の伝通院へ転住されて、そのあと六十八歳でもって京都の大本山清浄華院に昇董されておりますな」

そして明治二十七年（一八九四）五月二十日、大阪の相阪組・源正寺で布教中

に、享年七十歳をもって遷化された、というのが三宅さんの語る、ざっとした吉水良祐上人の履歴であつた。

良祐上人の無量寺住職時代に、ある事件が久玉でおきている。三宅さんの口から語られたそれは因縁話めいて、まことにおどろおどろとしたものであつた。それを次回に物語ろう。（この項づく）

追記

出稿後、三宅春光上人遷化の計報に接しました。筆者にははからずもこの取材の旅が、最期のお別れとなつてしまいました。

合掌し、つつしんで哀悼の意をささげるものであります。 松浦 行真

舞見御中

浄土宗宗務総長 大田 秀三 〒370 高崎市通町九〇 安国寺 慈光ビル(〇二七三)二三一四〇〇〇	埼玉工業大学 松川 文豪	鎮西学園理事長 鎮西高等学校校長 真和中・高等学校校長 上田 祐規 〒862 熊本市九品寺三一八一 電話(〇九六)三六四一八一七六	東山学園 学園長 石井俊恭 常任理事 山崎宏賢 西出澄弘
上宮学園 理事長 小林昭五 校長 小西祐謙 〒543 大阪市天王寺区上之宮町三一六	鎌倉大仏殿 高德院 住職 佐藤密雄 〒248 鎌倉市長谷四一二二八 電話(〇四六七)二二一〇七〇三 FAX (〇四六七)二二一五〇五一	法然上人御降誕地廿五霊場第一番 中国三十三観音特別霊場 誕生寺 〒709-36 岡山県久米郡久米南町里方八〇八 電話(〇八六七)二八一二〇二	淑徳高校名誉校長 保元寺住職 里見 達人 〒111 東京都台東区橋場二一四一七
浄土宗宗議会議長 野呂 幸進	寺内 大吉	萩市 常念寺 老隠 古本超然 〒738 萩市下五間町一七	華陽院住職 社会福祉法人 日吉町保育園理事長 堀田 良謙 〒400 静岡市鷹匠二二四一八

舞見御中

龍泉寺住職

伊東康雄

〒107 東京都港区南青山二―八―二五

大本山光明寺執事長
西念寺住職

北邨謙順

〒300 南足柄市沼田三一五
電話 〇四六五(七四)〇五八八

回向院住職

本多義敬

〒130 東京都墨田区両国二―八―一〇

稲田稔界

おてらはみなさんの相談所
桜と観音さまのお寺

浄心寺

小池政雄

〒113 文京区向丘二―一七―四

函館称名寺

須藤隆仙

〒040 函館市船見町一八―一四

中島真哉

青山梅窓院

〒107 東京都港区南青山二―二六―三八

旭蓮社大阿弥陀經寺

山田智旭

〒590 堺市寺地町東四―一―一四
電話 〇七二二(三三)六六四〇

〒151

東京都渋谷区幡ヶ谷二―三六―一

清岸寺

原口徳正

松庵寺内無為窟主

小川金英

〒025 花巻市双葉町六―四
仏教福祉センターよるひる銀行

正覚寺住職

楠美知行

〒030 青森市本町一―一―二二

大善寺老住

裏辻賢洲

〒211 福岡県宗像郡福岡町松原区
三九一四

舞見御中

法然上人二十五霊場 第二番仏生山法然寺 細井俊明 〒761 高松市仏生山町甲三二二五	伝通院住職 吉川哲雄 〒112 東京都文京区小石川三一四一六 電話(八一四) 三七〇一(代表)	圓光寺住職 加藤順底 〒020 盛岡市南大通三一―一四九	北川一有 長寿院 〒111 東京都台東区鳥越二―一三一八
本郷昌清寺 前住職 服部仙順 住職 服部光順 〒113 東京都文京区本郷二―八―三	檀王法林寺 だん王子供の家 信ヶ原良文 〒606 京都市左京区川端通三条上ル 法林寺門前町三六	浄運寺住職 野口善雄 〒376 桐生市本町六―三九八	西住院 戸川靈俊 〒606 京都市左京区黒谷町三〇
近龍寺住職 松濤弘道 〒328 栃木市万町二二一四 電話(〇二八二)二二一〇八〇二	芳泉寺 柳楽真純 社会福祉法人 大慈会・かんぎおん 〒386 上田市常磐城三一七―四八	光明寺 白幡憲佑 〒232 横浜市長南区庚台六六(久保山)	豊橋市関屋町二二二 宗教法人 悟真寺 代表役員 立松 辨成 電話(〇五三三)五二一五五六六

舞見御中署

愚鈍院 中村眞道 〒980 仙台市若林区新寺三―一二―一七 電話(〇二二)二五六―六〇五七	晴雲寺 塚田弘導 〒254 平塚市立野町六―一五	浄土宗鎮西流根元地 聖光寺 小林忍戒 〒600 京都市下京区寺町通 綾小路下ル中之町五八四―一	九品仏浄真寺 清水順碩 〒153 東京都世田谷区奥沢七―四一―三
お骨仏の寺 一心寺 貫首 高口恭行 〒543 大阪市天王寺区逢阪二―八―六九 電話(〇六七)七一―〇四四四(代)	浄土宗宗議會議員 斉藤价洲 〒110 東京都台東区東上野五―一―六 宗源寺	大松寺 酒井亮貫 〒108 東京都港区三田四―一―三八 電話(〇三三)四五―一二四九四	札幌新善光寺住職 太田隆賢 〒061 札幌市中央区南六条西一丁目
光心寺 北山良祐 〒425 焼津市東小川一丁目六―一	雲上寺住職 東海林良雲 〒985 塩釜市南町一一―一	大道社 〒102 東京都千代田区飯田橋 一一十一―六	法然上人鑽仰会

◎読者の皆様へのお願

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 八月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

平成二年七月二十五日

印刷

平成二年八月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷機

東京都千代田区飯田橋一十一一六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

舞見御中

総本山 知恩院

門主 藤井実應

大本山 増上寺

法主 中村康隆

大本山 金戒光明寺

法主 稲岡覚順

大本山 百万遍知恩寺

法主 林 靈 法

大本山 清浄華院

法主 江藤澄賢

大本山 善導寺

法主 藤堂俊章

大本山 光明寺

法主 藤吉慈海

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

〒170

東京都豊島区西巣鴨三二〇一

大正大学

電話(〇三)九一八—七三二—代表

〒603

京都市北区紫野北花ノ坊町九六

佛教大学

電話(〇七五)四九二—二四一—代表
通信教育部 四九二—〇二三九

学校法人 大乘淑徳学園

淑徳短期大学

理事長 長谷川良昭

〒174 東京都板橋区前野町五一—三—七

京都文教短期大学

学長 大橋 俊有

〒611 宇治市旗島町八〇